

2. 加賀市山中町西谷地区地域生活の総合調査—山中町の伝統民俗と合併後の変化

(代表) 浜中 香織 (文学部人間学科 文化人類学コース 3年)
芦田 裕香 小椋 恵美 北川 賢佑 久保田 翔子
相馬 翔一 土谷 利恵 戸納 彩華 中田 利香
浜島 悠樹 藤井 綾
(文学部人間学科 文化人類学コース 3年)

指導教員

鏡味 治也 (人間社会環境研究科フィールド文化学専攻 教授)
西本 陽一 (人間社会環境研究科フィールド文化学専攻 准教授)

1. 背景と研究目的

当研究室では、フィールドワークと呼ばれる、聞き取りを主とした調査を中心に研究している。フィールドワークは自らにとって未知の集落へ行き、そこでの習慣や行事を学ぶことで異文化を体感し、自分の持つ既知の文化を相対化することを目的とする。

学部生は3年次に石川県内のある地域を対象としたフィールドワークを課せられる。フィールドワークを通して、学部生はフィールドワークの手法と目的を学ぶのである。

2. 概要

3年次の春季学期に対象地域を選択、その地域について郷土資料や各種センサスを利用して文献調査を行う。そして、夏季休暇期間中に対象となる地域に1週間調査のために滞在する。本年度は加賀市山中温泉西谷地区の下谷、菅谷、栢野、我谷の4集落を調査対象地域に選定し、7月31日から8月7日までの8日間を地域に泊り込み、フィールドワークを行った。

聞き取り調査は主な手法としては、あらかじめ連絡を取った住民の方々のお宅に伺い、聞き取りを通して地域に関する全般的な事柄を学ぶ。また、そのほかにも道すがらの住民との雑談によって情報を得たり、祭りの準備等の参与観察を行ったりすることもある。聞き取り調査では、文献からは分からなかった、もしくは示されていない情報が得たり、それに記されている事柄とは異なる情報を得ることができる。

秋季学期に学部生は各々調査テーマを設定し、各自で補充調査を行いながらデータを補充し、中間報告会で理論を改善しながらテーマについてまとめ上げる。まとめ上げられた内容は、平成20年3月31日付けで調査報告書として刊行され、大学図書館などと共に地域の世帯にも配布され、成果の社会的還元が試みられる。

今回調査地に選ばれた西谷地区は、温泉産業従事者や会社勤務者の増加やダムの建設による立ち退きなどにより、大きな生業変化を経験した。この生業変化は、地区組織、漆器産業のほか、家屋のつくりや宗教行事などにもひろく影響と変化を与えている。石川県の他地域に比べて、少子高齢化の問題は割合に小さいとはいえ、大きな問題である。住民による地域活性化運動や老人会の活発な活動は、その背景の中で理解されるべきものである。

3. 調査内容

調査報告書の各章を成す調査テーマは、「地域の概要」、「西谷の地区組織」、「伝統産業としての山中漆器」、「生活改善運動による結婚の変化」、「家のつくり」、「西谷地区の神社」、「寺と仏教行事」、「道場について」、「『道場』再論」、「菅谷町の地域活性化運動」、「我谷ダムの影響」である。ここでは、「菅谷町の活性化運動」について取り上げて説明していく。

3-1. 菅谷町の活性化活動

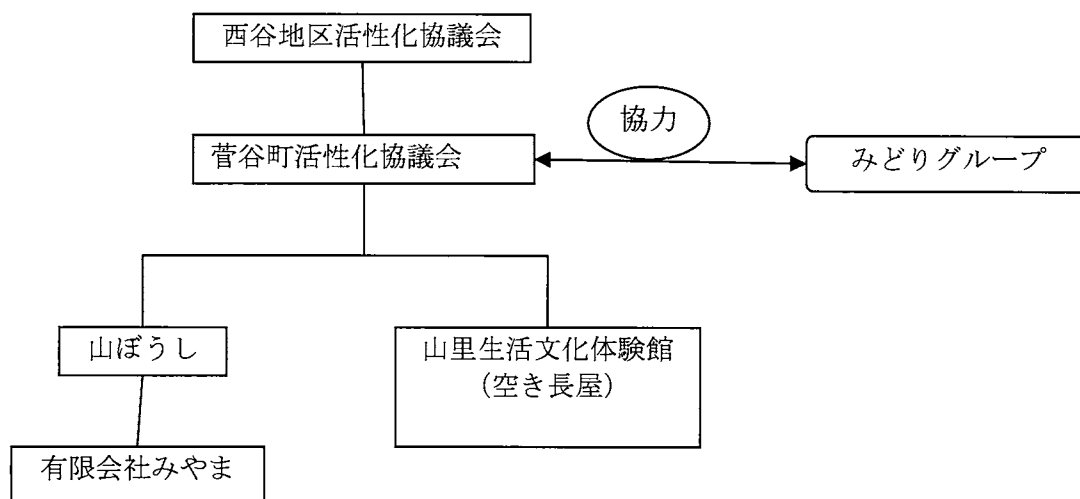
調査実習の対象地である西谷地区を訪れ、聞き取り調査をしていくうちに、お年寄りが皆生き生きとしていることに気がついた。そして、お年寄りが中心となって地域活性化活動を行っているを知り、どういう活動をしているのか、お年寄りが元気な秘密はその活動にあるのかと興味を惹かれていった。これから、7日間の本調査と二回の補充調査で調べた、菅谷町の地域活性化について説明したい。

西谷地区は、我谷ダム {昭和 40 (1965) 年完成} と九谷ダム {平成 17 (2005) 年完成} の二つのダム建設に伴う住宅移転により、14 あった集落が、下谷・菅谷・栢野・我谷の 4 集落へと大きく様変わりしてきた。進む過疎化に対し、西谷地区の活性化が課題となる。そのため、平成 12 年 (2000) に西谷地区活性化協議会が立ち上げられた。しかし、菅谷以外は世帯数も少なく、具体的活動は難しいということで、まずは菅谷を中心として平成 15 (2003) 年に菅谷町活性化協議会が立ち上げられる。

西谷地区は温泉街と接し豊かな自然環境から、旅行客の集中する地域となっている。そこで、地元の農産物や木地工房と観光が直結した活性化をはじめ、現在に至る。

農林産物が観光と結びつくと、生産意欲が高まり、高齢者の働く意欲、ひいては生きる活力が増したり、働く場を提供することも可能になる。菅谷町活性化協議会は、新しい観光地作りにぎわいにより、精神的にも経済的にも豊かな地区を築き上げていくことを、活性化事業の目的と考えているようだ。

図 1 菅谷町活性化に関わる組織や事業の関係図



現在は、菅谷町活性化協議会が中心となり活動している。事業の一つに、観光客の立ち寄り拠点施設「山ぼうし」の整備と、そこでの事業展開がある。そして、「山ぼうし」の事業運営のためだけに設立された組織である「有限会社みやま」がその運営にあたっている。また平成 20 (2008) 年には、空き長屋を利用した「山里生活文化体験館」を整備し、民芸品の販売などの事業展開をしていく計画が実現に向かっている。

「みどりグループ」は、昭和 35 (1960) 年頃から存在している農業団体で、菅谷町活性化協議会と協力関係にある。菅谷町活性化協議会はみどりグループの農産物販売所の拡大を図り、みどりグループは「有限会社みやま」へ「山ぼうし」で必要な分の農産物を安価で提供している。

菅谷町活性化協議会

町内会の役員の一部が活性化協議会の役員を兼ねることで“町内挙げての活性化活動”を

目指している。農産物や木地工房と観光が直結した活性化のため、観光客が立ち寄る拠点となる施設の整備、地区を回遊してもらうための仕掛けづくり、地区内を楽しんでもらうための環境づくり、滞在型来訪客を受け入れる拠点となる施設整備を行っている。

山ぼうし

山ぼうしは、総合案内所兼食事提供施設だ。食事処として、郷土料理と手打ちそばをふるまっており、笹餅、柿の葉寿司などの加工品販売所、みどりグループの野菜直売所にもなっている。附属建物「木彩館 けやき」では、山中漆器のろくろ木地挽き体験を行っている。お願いしてある 3 名の現役木地師に仕事の合間に来てもらうのだが、そんなに高い報酬を出せるわけでもないため、半分ボランティアの気持ちで協力してもらっているという。町全体の活性化に貢献するか、個人の利益か、そんな問題が垣間見えた気がした。

山中温泉の旅客や地域住民が主だが、北陸自動車道の整備によって、福井からの車客も増えたそうだ。この山ぼうし、平成 17（2005）年の開店以来一度も赤字を出していない。

有限会社みやま

「山ぼうし」の事業運営のために設立された組織である。

「食彩館 山ぼうし」と「木彩館 けやき」にある加工場の従業員はそれぞれ別に雇われており、54～77 歳の男女が働いている。従業員と出資者は重複していることも多く、ボランティアの気持ちをもって低賃金で働いてもらっていると聞いた。

有限会社みやまができて、何かいいことがあったかという質問には、定年退職後の雇用対策になること、定年退職後も働けるため地域の購買力が向上すること、みどりグループや出資者、従業員といった地域住民からの材料調達によって、会社の利益を地域に還元できること、孫に小遣いをやれることなどの答えが返ってきた。中でも多かったのは、「孫に小遣いをやれて嬉しい」という言葉だ。こういう身近な喜びから、心にゆとりが生まれたり、元気になったりして町全体が活気づいてゆくのではないかと感じた。

では逆に悩みはないかという質問には、すぐそばに旅館という、時給も高い職場があること、雇用主と従業員としての人間関係が難しいこと、という答えが返ってきた。温泉旅館が密集しており、旅館の方が給料もいたため、有限会社みやまの従業員を集めるのには苦労するそうだ。また、地元住民のみの会社であるため、雇用主と従業員という意識がどうしても低くなってしまいうらしく、社内関係とご近所づきあいの兼ね合いが難しいという。

みどりグループ

昭和 35（1960）年頃、「母ちゃん農業」になり、農業技術向上のため女性が集まったのが始まりで、現在は「みんなで集まって、楽しく野菜を作りましょう」をスローガンに活動している。

栽培しているのは季節によっても違いが、もち米や、おいしいと評判のサトイモとナスの他様々な野菜を作っている。もち米や野菜など、山ぼうしでの料理の材料に使われており、他にも山ぼうしでの朝市や直売所、A コープ（スーパーマーケット）、道の駅、山中温泉街での朝市、そして注文があれば旅館にも出荷するそうだ。

みどりグループの活動をしていて良かったのはどんなことか質問すると、孫に何か買ってやれる、年寄りが元気になったと返ってきた。

ある人は、「趣味で家庭菜園やっていて、みどりに入る前は余ったら捨てていたけれど、今はこうしてちょっとした小遣い稼ぎになる。うちの野菜食べてくれた人が“おいしかったよ”って言ってくると嬉しいしね。仕事も定年になってずっと家にいたんじゃ気が詰まるけど、みどりの活動で外に出て話したり、畑仕事したりすると元気出るよね」（60 歳代男性）と語ってくれた。

悩みを聞くと、若い人が入ってこないこと、人員不足という答えが返ってきました。菅谷町活性化協議会や、有限会社みやまのメンバーと重複する人も多いそうだ。

4. 考察

活性化に関わる人々は、「孫に小遣いをやれるから」「おいしいと言ってもらえると嬉しいから」「みんなと話しながら作業をするのが楽しいから」……動機は様々ですが、それぞれが楽しんで活動していた。

もちろん悩みがないわけではなく、地域活性化活動に賛同する人々とそれ以外の人々との間の温度差、人手不足、若者の不在といったことが浮かび上がっている。また、町内会の行事には多くの住民が参加しても、活性化のこととなると限られた人しか参加しないという現状がある。「“やりたいもんだけやりゃあいい”という考えがあるのかも知れんね」（70歳代男性）と、活性化活動に携わる方は寂しそうに語っていた。

けれども私の聞き取り調査では、活性化活動に関わる人々からは楽しさとやりがいを感じるコメントが返ってきている。それならば、どのような活動をしているのか、それによってどんな体験ができるのか、それを知らせることができれば、より多くの住民から賛同を得ることも可能になってくるのではないだろうか。

今回調査をしてみて、この活動は、“住民による”“住民のための”地域活性化活動であると深く感じた。施策の中には収益を得たり、観光客を呼び込むものも多いが、決してそれ自体が目的なのではなく、その活動を通して住民の心を温め、より住みよい町にしていくことが本来の目的だ。「孫に小遣いをやれる」「おいしいと言ってもらえると嬉しい」など、菅谷町活性化協議会の目的にもあるように“精神的にも豊か”になり、観光客が訪れることでいくらかの収益も得られ、“経済的にも豊か”になれば、日々の生活はますます楽しく、生き活きとしたものになるはずである。高齢社会だ、介護不足だと叫ばれる今の日本だが、菅谷町のお年寄りの元気さを見てみると、「地域活性化活動があれば介護いらず」なのではないかとさえ思えるほどだ。

今回は、地域活性化活動が住民に及ぼす影響を見てきたが、今後は行政との関わりや、観光と結びつけた事業運営の面から改善点を探したいと思う。

5. おわりに

- ・ フィールドワークを実施して初めて、調査地の成員の方々が生活を営む中で抱いている心境のような、文献資料からは見えてこない情報を得ることができた。
- ・ フィールドワークを通して異文化を体感し、自分が身を置いている文化を見つめなおすことができた。
- ・ 記録として残されることの少ない、時が経つに連れて忘れ去られてしまうような、調査地住民の方々の貴重なお話を調査報告書という形にすることができた。

また、2007年度の調査実習にあたって、2005年（平成17年）に加賀市に合併した山中町の伝統民俗と合併後の変化を調べて欲しいという加賀市からの依頼もあり、このテーマでの申請となったが、フィールドワークというものを、これを読まれる人の多くに容易にイメージしてもらいたく、ここでは伝統民俗と関係のない地域活性化運動について書くことにした。私が聞き取り調査した限りでは住民に大きな影響を与えたのはダム建設であり、合併による変化は特に見られなかったことをここに報告しておきます。

毎年の調査実習は多くの方々の協力を必要とする。本年も調査地の成員の方々を始め、多くの協力を頂いた。この場を借りてお礼申し上げる。